

ばく りゅう
麦粒

2008. Winter

麦粒 / NO. 110

発行・キリスト教センター

目 次

生きている者の神	長田 康志 (2)
隠れた行ない	渡部 信子 (5)
あなたの隣人は誰ですか	田口 誠弘 (7)
見よ、神の子羊	葛井 義憲 (9)



名古屋キャンパス白鳥学舎チャペル

生きている者の神

長 田 康 志

主は言われた。「わたしは、エジプトにいるわたしの民の苦しみをつぶさに見、追い使う者のゆえに叫ぶ彼らの叫ぶ声を聞き、その痛みを知った。それゆえ、わたしは降って行き、エジプト人の手から彼らを救い出し、この国から、広々としたすばらしい土地、乳と蜜が流れる土地、カナン人、ヘト人、アモリ人、ベリジ人、ヒビ人、エブス人の住む所へ彼らを導き上る。見よ、イスラエルの人々の叫び声が、今、わたしのもに届いた。また、エジプト人が彼らを圧迫する有様を見た。今、行きなさい。わたしはあなたをファラオのもとに遣わす。わが民イスラエルの人々をエジプトから連れ出すのだ。」

モーセは神に言った。「わたしは何者でしょう。どうして、ファラオのもとに行き、しかもイスラエルの人々をエジプトから導き出さねばならないのですか。」神は言われた。「わたしは必ずあなたと共にいる。このことこそ、わたしがあなたを遣わすしるしである。あなたが民をエジプトから導き出したとき、あなたたちはこの山で神に仕える。」

(旧約聖書 出エジプト記 3章7～12節)

今日読んでいただいた、出エジプト記。これは旧約聖書の物語ですけれども、ここにモーセという人物が出てまいります。モーセはイスラエルの歴史の中で、非常に大きな役割を果たした人物であります。それは、紀元前13世紀頃。その当時イスラエルの人々は国も持たず、エジプトの国の中で生きている民族の一つでありました。しかし、イスラエル人はエジプトの国の中でどんどん増え広がっていききました。それを見て、エジプトの王ファラオが非常に脅威を感じました。「このままでは、イスラエル人(当時ヘブライ人)に国を乗っ取られるのではないか」。そのことに恐れを抱いたヘブライ人に、ファラオ国王は重労働を命じます。それによって、ヘブライ民族の弱体化を図ろうとしたのです。ところが、いくら奴隷として使っても、イスラエル人はどんどん子どもを増やしていく。そして遂にファラオは、「産まれてくるヘブライ人の男子は全てナイル川に投げ込め」といって、大虐殺を命じました。そういう恐る

べき状況の中で、モーセという子どもが生まれるわけです。初め両親は、子どもの命を守るために家の中にかくまうのですが、だんだん泣き声も大きくなり、周りにも知られるようになります。このままでは、この子も殺されると思い、その子を藁で編んだ籠に入れて、ナイル川の藁の茂みの中に置くわけです。そこへ、たまたま通りかかったエジプト王の娘、つまり王女がモーセを見つけます。彼女はすぐに「この子はヘブライ人の子どもである」と分かりましたが、置き去りにされたモーセを哀れんで拾い上げ、生涯自分の子どもとして育てることにします。皮肉にも、自分の父親が殺そうとしていたヘブライ人の子どもをです。そういうところから、モーセの波乱万丈の人生が始まっていきます。しかし、このモーセがエジプトの王家で育てられていきながら、いつか自分の出生の秘密を知ることになります。エジプトの王女に育てられていた自分は、実はヘブライ人であの奴隷の民の子なのだ、ということを知ったモー

セの立場というのは、複雑なものであったかと思います。

あるとき、エジプト人がヘブライ人を殴っている場面を目の当たりにします。彼は周りを見回し、誰もいないのを確認してから、ヘブライ人を虐待していたエジプト人に襲いかかって、遂に殺してしまうのです。その遺体を砂に埋めて隠し、何事もなかったかのように元いたエジプトの王宮に帰っていききました。彼は再び町に出て、今度はヘブライ人同士が争っている場面に出くわし、仲裁に入ります。仲間を殴っていた、悪い方のヘブライ人が「誰がお前を俺たちの裁判官にしたのか?お前はあのエジプト人にしたように、また俺をも殺すつもりか?」と言いました。その時モーセは、自分のしたことがすでに発覚していたと知り、恐れを抱きました。そのため結果として彼はエジプト王からも命を狙われるようになり国から逃亡することになりました。

逃亡した先はシナイ半島、ミデアンの地といわれているところですが、そこでミデアン人の司祭エトロという人に救われて、身を寄せ生活することになります。そして長い間、そのミデアンの地で羊飼いをして生活しました。それがモーセの辿ってきた道であります。その後、モーセの召命、つまり神の声を聞くことになります。彼は奴隷の民であるイスラエルを、エジプト(ファラオ)の手中から救い出せと、神より命じられることになります。その物語というのが、かつてのハリウッド映画「十戒」であります。私の中でその映画の印象的なシーンとして、イスラエル民族が脱出する際、エジプトの軍勢が追っかけてきて捉えようとしていたときの場面があります。モーセが杖を海上に差し出すと海が二つに割れ、垣根のようになったところをイスラエルの人々が通ると、その後を追いかけてたエジプトの戦車が真ん中で泥沼にはまってしまい、軍勢が立ち往生しているところで、二つに割れていた海は元に戻り、軍隊が全滅してしまうという非常に劇的な場面です。そこで活躍したモーセの偉大さも、印象深いものであります。しかし、その聖書の物語を読む限りこのモーセというのは、本来本当に自分が何のために

生きているのか分からない、いわゆる現代風な言い方をすれば「居場所を持たない人」だったんです。彼はイスラエルの子でありながら、エジプトの王女の子として育てられていました。彼は自分がヘブライ人であることを知りながら、ヘブライ人がエジプト人にいじめられているのを見て、彼は正義感が強いということもありましたが、見るに見かねてついにそのエジプト人を殺めてしまいます。そして彼はその後、ヘブライ人の見方になることを決意するわけです。ところが彼がそこでヘブライ人の中に入っていくのかと思いきやそうではなく、自分が育てられたエジプトの王宮に戻っていきます。大変中途半端な状態ですね。エジプトの王家の人間であるということは、自分にとっては大変都合の良い隠れみのでした。エジプトの王家の人間でありながら、ヘブライ人の助けに回るといって、権力者の立場でありながら弱者を助けようと、正義の味方を気取っていたのかも知れません。今というならば暴れん坊將軍のような存在だったのでしょうか。しかし、そのモーセがヘブライ人同士の喧嘩の仲裁に入ったときに、「お前は一体何者だ?俺たちの裁判官か?」と言われ、ヘブライ人からも認められずに人殺しとしか見られていないんだということを知り、そこで挫折を覚えることになります。そしてついには、本当の犯罪者として追われるようになってしまいます。彼は、異郷の地に逃げのびるわけです。そこで結婚して子どもが産まれ、家庭を築くことになりましたが、子どもを授かったときに、子どもに名付けた名前が「ゲルショム」。それはヘブライ語でゲール=寄留者、よそ者、居場所を持たない者ということの意味ですが、そのような名前を子どもに付けたのです。これはモーセが家庭を持っても自分の居場所がなかった、そんな心境を表しているのでしょうか。どっちつかずの中で、羊飼いの生活をしていた時に、彼は神と出会うことになります。彼が80歳になる頃、柴が燃えているのに燃え尽きない不思議な光景を目にします。近づいていくと炎の中から「モーセよ、モーセよ」と呼びかける神の声が聞こえてきました。そして、神はモーセに向かっ

て「私は、あのエジプトで追い使われている民、ヘブライ人の叫び声を聞いた。行って彼らを救い出なさい。」と命じました。モーセにとって、それは思いがけない使命でありました。このままミデアンの土地で、居場所のない人間として死に絶えていく人生だと思っていた彼に、神は新しい使命を与えられたのです。しかしモーセにとって、どうして自分がそのような使命を果たさなくてはならないか理解出来ませんでした。かつてはヘブライ人の味方に立って戦おうとしたが受け入れられず、もはや自分の居場所はどこにもない、今更正義の味方を演じる歳でもない、と彼は考えていました。が、神はそういったモーセの事情は全て知り尽くしていたはずですが、全く無視するわけです。このことを、私たち自身に置き換えてみてください。

私は50歳であります。私がもし今このような使命を受けてしまったら、勘弁してください、私は指導力もないし、50歳になってそんなしんどいことをはたくありません、といった気持ちになるかと思えます。しかし、そういう人間の事情を神はむしろ無視するように、「あなたがどんな欠陥があって、失敗を繰り返してきた人間であろうが関係ない。私は今、あなたを遣わす。だから行け。」と使命を授けるわけです。

私は今、刑務所の教誨師という仕事をしています。これは刑務所あるいは拘留所の中で、懲役を受けている犯罪者の教育をするという仕事です。宗教家の方にも是非更生のお手伝いを、ということで教誨師という仕事があるわけです。刑務所でお話をするのですが、最初、その話を頼まれたときに先輩から電話がありまして、「この仕事を君にお任せしたい。君にしか頼めない仕事だから。」と言われました。君にしか頼めない、という言葉が

ら使命感を感じ引き受けてしまったのですが、後で後悔することばかりでした。本当にやれるのか、やれているのか全く自信がなかったのです。ところがある時、一人のそこに収容されている人と、個人面接の時間がありました。ここを出所したら教会に行きたいとの相談を受けました。その後、その人が「先生は前に、ここで話をしても誰にも自分の言葉は通じていないし、私は必要とされていないのではないかとおっしゃっていましたね。確かに、僕以外の何百人という収容者は先生を必要としていなかったかもしれませんが、少なくとも私は先生を必要としていますから頑張ってください。」と、私に言ってくれたのです。私は思わず「どうもありがとう！」と頭を下げてしまいました。その一言を聞いたときに、「ああ、自分が今ここに居るのはこのため。正にこの人一人だけの教誨師としてここにいてもいいんだな。」と、初めて自分の居場所を見つけたような気がしました。人間というのは誰か一人でもいいから、人に必要とされているという確信を得たときに、初めて自分の居場所見つけ、心の居場所を見出すことが出来るのだと思いました。

モーセの物語というのは、非常に長い物語なので最後までお伝えすることは出来ませんが、モーセもまた居場所が無く、何の生きている意味も見い出せていなかったのですが、神は彼を見つめ「私はあなたの神である。私は今あなたを遣わす。」と使命を与えられました。私たちもそういう声を聞くとき、誰もが自分の人生の価値、生きる道というのを持つことが出来る。そういう価値観を持った人間は、どんな困難や未知の人生の荒波の中をも、希望を持って生き抜くことが出来るのではないのでしょうか。

隠れた行ない

渡部 信子

「見てもらおうとして、人の前で善行をしないように注意なさい。さもないと、あなたがたの天の父のもとで報いをいただけないことになる。だから、あなたは施しをするときには、偽善者たちが人からほめられようと会堂や街角でするように、自分の前でラッパを吹き鳴らしてはならない。はっきりあなたがたに言うておく。彼らは既に報いを受けている。施しをするときは、右の手のすることを左の手に知らせなくてはならない。あなたの施しを人目につかせないためである。そうすれば、隠れたことを見ておられる父が、あなたに報いてくださる。」

(新約聖書 マタイによる福音書6章1~4節)

聖書には「見てもらおうとして、人の前で善行しないように注意なさい。施しをする時は、右の手のすることを左の手に知らせなくてはならない。」とあります。私たちは毎日、人と人との関わりの中で生きています。特に学生の皆さんは、一日誰にも会わず、誰とも口を聞かないということは、あまりないのではないかと思います。そんな中であって、私たちはできることならば、よい人間になりたい、またよいことをしたい、そして人に喜んでほしい。そういう素直な気持ちがどこかにあるのではないのでしょうか。人から喜ばれると嬉しいし、感謝されると自分もまんざらでもないなど、そういう気持ちになるものです。私たちが人から認められたいほめられたいすることは、喜びであり、逆に人から無視されたり軽くあしらわれたりすると、苦痛になったり、場合によっては怒りになったりもします。皆さんもそうだと思います。

こどもの能力を引き出して伸ばそうと思ったら、まずほめなさい。そういうことが言われます。長所を認められ、ほめられたこどもは、喜んでその能力を発揮し始めます。それはこどもに限ったことではありません。成長して大きくなっても同様です。叱られて「君なんか、まだまだだ。」と言われて逆に「やってやろうじゃないか。」と奮起する気持ちはおとなにもあるものです。かと言って、いつも批判されてばかりいると、今度は何もやる気がなくなってしまいます。

自分が受け入れられ、認めてもらえる、評

価される。そして、自分のしたことが相手に喜んでもらえる。そういうことがあって、私たちは毎日嬉しく生きていけるのではないのでしょうか。そのことがよりよく生きようとする意欲につながり、そして成長につながって行くのではないのでしょうか。こうしてみますと、誰かから受け入れられる、認められる、感謝される、そして、そうしてもらいたいという気持ち。それらは決して悪いことではありません。人から「助かったよ、ありがとう」と言われたり、「君、なかなかやるねえ。」そういう風に言われ、そこで自分の能力が活かされる。そして仕事や勉強の進展に役立つ。人との関係が円滑になって行く。そういう生活が生まれるわけです。

けれども今、一緒に読みました聖書では、私たちが誰かからそのように認められたいほめられたいする時に、そこに起こってくる私たちの偽善、また妙な自己満足や誇り、優越感、そういうものに私たちがすっかり支配されてしまわないように気をつけなさい、とされているのです。そして、私たちの言葉や行いが、誰かに見られるためや、ほめられることが第一の目的になってしまうことを、聖書は警告しています。もちろん私たちが生きて行く上で、一人の人として誇りを持つというのはとても大切なことです。けれども、その誇りは鼻持ちならない自意識と紙一重ではないのでしょうか。それが高じていくと、人から見られて認めてもらえる場面でだけ善行をするといった極端なことになりかねません。

それは私たちの人間としての生き方にとって、寂しいことです。

この聖書の言葉を読むと、思い出す一つのお話があります。今日ここに持ってきましたが、『花さき山』という絵本です。手に取って見たことがある方もいるかもしれません。この表紙に描かれている、あやという名前の女の子がいました。あやは毎日家族と一緒に働き、一所懸命生活をしていました。ある時、村のお祭りで、こどもたちは皆新しい着物を作ってもらいました。ところが、あやの家は貧しく、あやと妹の二人分の着物を作ってやることはできない状況でした。それがわかってるあやは、「私はいらないから、妹に着物を作ってあげて」と言うのです。いよいよ明日がお祭りという時、ご馳走を作るため、あやは山へ山菜を探りに出かけました。ところが、そこで道に迷ってしまいます。山の奥深く、もう薄暗いような森の中であるのに、あやが足元を見るとそこは一面のお花畑になっていました。ただびっくりしているあやの前に、山んぼが現れて言います。「おまえの足元に咲いている赤い花は、おまえが咲かせたんだよ」。そして「昨日おまえが、自分の着物を我慢して妹に作ってあげてと言った、その時にこの花が咲いたんだ。この花畑の花はみんな、そういう風に誰かが誰かのために喜んでもらえることをした時に、人知れずここに咲くんだよ。」と言うのです。

自分が我慢をして人のために捧げた時、あるいは人が喜んでくれることをした時、その相手から直接ほめてもらったりごほうびをもらうのではなく、人知れず山の奥深い所で一輪の花がフワ～ッと咲く。そこが私は大好きです。美しいお話だな、と思います。この話と今日の聖書の箇所は似ているなと思いました。

けれども、聖書は更に深いのです。聖書は、花が咲かなくても、それでもいいではないか、そう言うのです。お花が咲くということがわかると私たちは、ほめてもらえなくてもどこかでお花が咲いているはずだと期待するようになります。人間の欲望は大変深いもので、まず相手から直接ほめ言葉がほしい、喜んでほしいと思います。そうならなかった時は、それなら別のことできつと何かよいことがあるだろう、そう考えて自分を慰めようとしま

す。ところが自分がどんなによいと思うことをしても、何の反応や報いもどこからも来ないということになりますと、少々私たちの考え方は違ってくるのではないのでしょうか。何をしたら自分には何の報いもない、そういう風にやけになったり虚しい気持ちに陥ってしまうことがあるのではないのでしょうか。聖書は語ります。「自分の周りを見渡してみても、誰も自分をほめてくれる人がいない。けれども、自分の周りではなく上を見てごらんなさい」と。天におられる神さまが私たちのことを喜び、見ていてくださるのです。

私たちの社会では毎日のように、誰かが人の命を奪ってしまったり、人を傷つけるような大きな事件を起こしてしまったり、ということが起こっています。そうした事件の当事者に尋ねてみると、人間関係でむしゃくしゃしていたとか、こどものころにいじめられた傷が今でも残っている、と答える人たちが多くいます。自分は認められ受け入れられて来なかった、今もそうだ、と心が深く傷ついているのを感じます。私はそういうニュースに触れるたびに、本当に他人事とは思えません。私自身もたいへん小さなレベルですが、誰も自分のことをわかってくれないとか、なぜ自分一人が忙しいのか、なぜ自分はいつもこんなことになってしまうのか・・・などと毎日のようにつぶやいたり嘆いたりしているのです。けれども私たちは、たとえ誰も自分に伝えてくれなくても、「あなたをいつでも見ているよ」と言うてくださる方が天におられる、そこに喜びと希望を見つける者でありたいと思います。神さまの喜びを喜びとすること、聖書はそれを教えてくれます。その時々、人から見られるためとか、相手からほめられるために行動するということからは、すっかり自由になって、私たちは伸び伸びと次の一歩を踏み出すことができるのではないのでしょうか。もちろん、どこかで私がしたことに対して花が咲いていると想像するのも、とても楽しいものです。でも、そうでなくても、私たちの喜びが直接の形でこの地上に現れなくても、私たちの歩みは「天国に刻まれ」、「神さまが喜んでご覧になっている」、そういうことを心に覚えながら、一步一步を踏み出していきたいと思います。

あなたの隣人は誰ですか

田 口 誠 弘

イエスはお答えになった。「ある人がエルサレムからエリコへ下って行く途中、追いはぎに襲われた。追いはぎはその人の服をはぎ取り、殴りつけ、半殺しにしたまま立ち去った。ある祭司がたまたまその道を下って来たが、その人を見ると、道の向こう側を通って行った。同じように、レビ人もその場所に通って来たが、その人を見ると、道の向こう側を通って行った。ところが、旅をしていたあるサマリア人は、そばに来ると、その人を見て憐れに思い、近寄って傷に油とぶどう酒を注ぎ、包帯をして、自分のろばに寄せ、宿屋に連れて行って介抱した。そして、翌日になると、デナリオン銀貨を二枚取り出し、宿屋の主人に渡して言った。『この人を介抱してください。費用がもったかかったら、帰りがけに払います。』さて、あなたはこの三人の中で、だれが追いはぎに襲われた人の隣人になったと思うか。」律法の専門家は言った。「その人を助けた人です。」そこで、イエスは言われた。「行って、あなたも同じようにしなさい。」

(新約聖書 ルカによる福音書10章30節～37節)

今朝、私は本校の建学の精神を知り、「ああ、いいな。」と思いました。この大学の建学の精神である敬神愛人は、聖書からきています。「第一の掟は、これである。『…心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くし、力を尽くして、あなたの神である主を愛しなさい。』第二の掟は、これである。『隣人を自分のように愛しなさい。』この二つにまさる掟はほかにない。」と語られたイエスのみ言葉にもとづいているのです。

私は本日「あなたの隣り人はだれですか。」という題でお話しをさせていただきに当たり、聖書の箇所としてルカによる福音書10章30節～37節を選んだのですが、建学の精神と一致しているところなのでとても嬉しく思います。今日はこの箇所のおおよその意味を、私の体験談も含めながら皆さんにお話したいと思います。

この聖書の箇所は、イエス・キリストと、律法学者の対話の形式になっています。律法学者とは、当時の宗教的な知識や教養のある人でした。その方とイエス・キリストが対話をしているわけです。「何をすれば永遠の命を受け継ぐことができるでしょう

か？」という律法の専門家の問いに対し、イエスはいわばこの大学の建学の精神と同じ言葉で答えを返されたのです。すると、この律法の専門家は、自分の正しさをイエスの前で見せつけようと、「あなたの隣人とは一体どんな人なのですか？」と問いかけます。そこでイエスは次のたとえ話をするわけです。

ある旅人が追いはぎに遭い半殺しになって、着るものもお金も取られ倒れていました。そこへ最初に通りがかったのが祭司。多分この時代の宗教的な儀式をする、権威ある偉い人です。祭司は通りかかったけれど、関わりたくないためにわざと反対側の道を歩き、通り過ぎました。その次にレビ人がきました。この時代レビ人は、社会の組織でトップクラスの階級の人たちでした。そのレビ人もまた同様、知らんぷりをして通り過ぎました。そこへ、今度はサマリア人の旅人が参りました。当時のサマリア人は、非常に軽蔑されていました。サマリア人は倒れていた旅人を介抱し、宿へ連れて行き、宿の主人に「介抱してあげてください。宿賃が足りなかったら帰りにその

分を払います。」とまで言って、半殺しになった旅人を助けました。この3人の内、誰が半殺しに遭った旅人の「隣人」ですか？と、イエスは律法の専門家に質問します。もちろん、律法学者はサマリア人、と答えます。

「あなたも帰って同じことを行いなさい。」イエスはそう言われました。

さて、現実の世界の中で、「隣人」とは一体誰か、ということをご一緒に考えてみたいと思います。

「隣人」というのはどんな状況であっても、たとえ最悪の困難の中にあっても、その人から離れず助けてくれる人です。皆さんにとって、その人は誰ですか？ 私の隣人になってくれた人のことをお話してみます。私は、経済的に破綻に近い状況にまで陥った経験があります。その時、まわりの人は皆、離れて、逃げていきました。たとえば会社勤めしていても、何か失敗して左遷されたり、成績が悪かったり、経済的に困ったりすると関わり合いになりたくないの、皆、逃げていくことが多いですね。それは別に不親切だからではなく、とばかり受けたくないし、面倒を見るはめになりかねないし、人の世話までする余裕はないということで、人間としての普通の心理状態だと思います。しかし、どんな最悪な状況に陥ったときも、自分から離れなかった人が、皆さんにも必ずいたはず。その人が「隣人」です。

私にとっての隣人は、学校を卒業するまでは「親」でしたが、社会人になってからの自分の人生を振り返ってみて、隣人とは誰だったのかな、と考えました。私は55歳でクリスチャンになりました。社会人になってから今日までの、「私の隣人」は誰だったかを考えてみました。

私にとっての隣人、それは誰だったと思いますか？ 普段から小言が多くて、私がストレスを感じる人、この人がいなければ自由でいいのになあ、と何度か思ったことがある人でした。それは私の家内でした。家内は、私が破産状態になって、周りから人びとが皆去っていったときも、じっと隣で

私を支えてくれました。夫婦って大変です。結婚生活は修行みたいなものです。時には相手を憎むことさえあります。しかし、信仰からの気づきがあったせいですが、家内を隣人と思うようになってからは、小言が小言として聞こえなくなりました。一番けむたい人が私の隣人でした。では「あなたは誰の隣人ですか？」と聞かれた時に確信を持って答える自信がありますか？ どんな時でもその人の傍を離れず、精神面でももちろんそうですが、隣人として誰かの支えとなって、応援をしたことはありますか？ 私は家内が隣人と分かってから、夫婦の関係を考え直し、家内には随分優しく接するようになりました。かなり家事も手伝うようになり、小言も小言として聞こえなくなりました。どんな時でも一緒に生きていこうとすれば、それだけ普段、相手のことを遠慮せずに指摘してしまいがちです。何にも言われなくなった方が逆に変なんでしょうかと、最近は思います。こう考えてきますと、「自分は家内の隣人です。」と、自信を持って言える様にならないといけないと思うのです。

実はイエス・キリストは地球上の全ての人間、一人一人に対する隣人なのです。なかなか私達はこれに気づきません。私も気づくのに5年もかかりました。信仰に目覚めてようやく、非常に苦しい状況に置かれている私たちを介抱したり、どんな時も赦してくれたり、無償で私たちの費用を根気よく支払ってくれている方がイエス・キリストなんだと分かりました。つまり信仰の目が、今まで見えなかったものを見せて下さったのです。イエス・キリストは私たちにとって隣人なのに、「私たちは、そんな人は関係ない。」といった態度でいていいのでしょうか。この機会に是非あなたの隣人のことを考えてください。

本日は、皆さんが学ばれている学校の建学の精神に少しふれてみました。いつも私達の隣人でいて下さるイエス・キリストのことをもっと知り、同時に、自分が誰の隣人なのか常に考えておきたいものですね。

見よ、神の子羊

葛井 義憲

その翌日、ヨハネは、自分の方へイエスが来られるのを見て言った。「見よ、世の罪を取り除く神の子羊だ。『わたしの後から一人の人が来られる。そのお方はわたしにまさる。わたしよりも先におられたからである。』とわたしが出たのは、この方のことである。」

(新約聖書 ヨハネによる福音書 1章29～30節)

その後、イエスは出て行って、レビという徴税人が収税所に座っているのを見て、「わたしに従いなさい。」と言われた。彼は何もかも捨てて立ち上がり、イエスに従った。そして、自分の家でイエスのために盛大な宴会を催した。そこには徴税人やほかの人々が大勢いて、一緒に席に着いていた。ファリサイ派の人々やその派の律法学者たちはつぶやいて、イエスは弟子たちに言った。「なぜ、あなたたちは、徴税人や罪人などと一緒に飲んだり食べたりするのか。」イエスはお答えになった。「医者が必要とするのは、健康な人ではなく病人である。わたしが来たのは、正しい人を招くためではなく、罪人を招いて悔い改めさせるためである。」

(新約聖書 ルカによる福音書 5章27～32節)

新聞を開くと、心底怒りが湧き出るような、悲しい出来事が後を絶ちません。殺人、恐喝、詐欺等、どうしてこれほどにまで、道徳がなくなり、欲望への抑制力というものが効かない時代になってしまったのでしょうか。

弱く小さな存在さえ痛めつけて、日頃のうっぷんを解消してしまおう。自分の不安、苦しみを解消するためなら何をしてもかまわない。何かそんな風潮が、日本を覆っている気がしてならないのであります。

でも、そんな、悲しい時代はこれまでもあったのです。たとえば、主イエスが生きておられた頃もそうでした。自己保全のため、周囲の人を押し倒し、傷つけてでも生きようとした人が大勢いたのです。ご存知のように、主イエスが生きておられたパレスチナ地方は、当時ローマ帝国が支配していました。ローマの軍隊、いわばユダヤの国にとっては外国軍隊が駐留していたのです。ユダヤ人は自分たちの手で国を統治し、自分たちの法

律で人を治め、社会を形成することができなかったのです。当然、人々は、支配されていることへの苛立ちや、悔しさ、怒りを充満させていました。そんな中、時としてその怒り、不安や、やるせなさのはけ口が、ローマではなく、弱い人々に向けられたのであります。

たとえば徴税人がそうでありました。聖書に、徴税人と呼ばれた、税金を取り立てる人の事が書かれていました。彼は、ユダヤ人でした。多くの同胞とともに、ローマ帝国の支配の中に生きている人間でありました。その彼は、自分が生きてゆくために、ローマ帝国に雇われ、税金の徴収にあたっていたのであります。当時ローマ帝国の手先になっていた徴税人は嫌われていました。しかし、生きてゆかねばならなかったのです。食べてゆかねばならなかったのです。心に苦い物を持ちながらも生きてゆかねばならなかったのです。一面、徴税人はローマから仕事に約束されながらも、時として人から嫌われ、命さえ奪われそうになったこと

もあったと思われま。聖書に登場して
います徴税人レビもそうなのです。人か
らにらみ付けられ、毛嫌いされていたの
です。

さて、そんな社会のなかで嫌われてい
る一人ぼっちのレビを、イエスは特別の
目で見つめられたのであります。ルカに
よる福音書5章27節にはこう書かれて
います。「主イエスは収税所に座っている
レビを見た」。これは周りの人々がレビを
見た、罵倒する目や、あざけりの目では
なく、慈しみと愛のまなざしでありまし
た。

そんな、イエスのまなざしに接して、
レビは、「オレを赦し、認め、いまからで
も生かそうとして下さる方がいる。」と確
信したので。久しぶりに、レビはそんな
温かな目に会ったのです。そこで、
レビは思ったのです。「この方と一緒に
行こう、この方に従って生きてゆきたい。」
そんなレビに主イエスは宣言しました。
「わたしに従いなさい。」すると、彼はな
にもかも捨てて従ったのであります。
人々から嫌がられ、さげすまされ、いじ
められ、卑屈になって希望さえなくして
いた徴税人レビに光がさしたのであります。
不安や絶望はなくなり、勇気と希望
に包まれたのであります。

ルカの5章32節にはこう書かれてい
ます。主イエスがこの世に来たのは「病

人や、罪人のため。」だと。レビはそんな
主イエスに招かれました。いつも夜の闇
のように暗い人生だったのが、主イエス
に出会って、明るく楽しい人生へと変え
られたのであります。

主イエスの歩みは、この世でさげすま
され、罵倒され、社会のひずみのなかで
苦しみ、耐え難い困難を経験している
人々への救いの出来事でありました。歩
むべき道が見えない人々に、その道を示
してゆかれることであります。

本日お読みしましたヨハネによる福音
書1章29節の「神の子羊」とは、自ら
を低くし、この世のなかで苦しんでいる
人々を救う出来事を、成就する方のこと
を表しているのであります。

十字架の上で多くの人の罪のために亡
くなられた主イエスは、この世で悲しみ、
社会のなかでもがき苦しむ人々に、希望
と安らぎと平安を豊かにあたえるために、
神がおつかわしになった子羊だったので
す。

今の時代は、様々な社会のひずみのな
かで、人と人が傷つけあう悲しい時代で
あるといっても過言ではないかもしれま
せん。しかし、神様が「子羊」として御
子イエスをこの世にお送りくださいまし
た。この主にわたしたちもまた、徴税人
レビのように従うとき、新しい希望への
第一歩を踏み出すことができるのです。

(ふじいよしのり 人間健康学部長・宗教部長 2007.9.25 チャペルアワー奨励)



チャペル・ブックレット

宗教部では今までの「宗教講演会」のお話をブックレットにまと
め、発行しています。無料でどなたにでも差し上げますので、ご希
望の方は、キリスト教センターへどうぞ。チャペルにも置いてあり
ます。

- No.1. 「経済の論理と人間の論理」(塩沢 美代子)
- No.2. 「心を問い続けて」(谷 昌恒)
- No.3. 「国際化時代におけるキリスト教の使命」(徐 洸善)
- No.4. 「激動化する現代史と神のみことば」(池 明観)
- No.5. 「生きることの感動」(金 纓)
- No.6. 「生きるよろこび」(村田 佳寿子)
- No.7. 「心を支えているもの」(山本 将信)
- No.8. 「主の愛この眼にありて」(武岡 洋治)
- No.9. 「日本におけるキリスト教主義大学の使命」(池 明観)
- No.10. 「いのちを支えるホスピスケア」(柏木 哲夫)
- No.11. 「天と地のひびき」(小塩 節)
- No.12. 「絵本のちから」(松居 直)
- No.13. 「ハイジ、クララは歩かなくてはいけないの？」

- こどもの物語と聖書に見られる<しょうがい者>差別 -
(荒井 英子)